

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12314

研究課題名（和文）書論からみた清代書法教育の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on Qing Dynasty Calligraphy Education from the Viewpoint of the Theory of Calligraphy

研究代表者

高橋 佑太（TAKAHASHI, Yuta）

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：30803324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は従来、閑却視されてきた個々の書法教育に焦点をあて、清代の書論から関連する言説を抽出し、書家や師弟を中心にどのような書法教育が行われていたのか、考究したものである。第一に、結構法、特に一格を九つに分割する「九宮法」という学習法の清代における多様な展開を追求し、その背景についても考究した。第二に、敷き写しを意味する「模書」と、「臨書」の捉え方に着目し、どちらが重視されたか、また推奨された順序等といった観点から、往時の学書方法の推移について考察した。第三に、中期以降、多く確認できる童子や初学者向け学書方法に着目し、当該期に新たに提言された学習方法を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、中国清代の書学文献、特に書論から、従来、閑却視されてきた個々の清代の書法教育の実相を解明した点にある。当該期に新たに提唱された学書方法や学書の順序、年代別学習法など、当時の書法教育の一側面を明らかにしたのみならず、現代の書法教育と通じる学習法が清代に提言されていたことを明らかにした点にも意義が見いだせる。また、広範な清代の書論から一定の視点で言説を抽出し、堅実に読解するという手堅い研究方法によって遂行した点に研究の価値が認められる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on individual calligraphy education, which has been neglected in the past, extracts related discourses from the calligraphy of the Qing Dynasty, and explores what kind of calligraphy education was conducted mainly by calligraphers and masters and students. First, we pursued the diverse development of the method of learning called the "Jiu Gong Method," which divides one square into nine parts, and also examined the background to it. Secondly, focusing on how to understand "Moshu" which mean imitations and "Rinshu," we examined the transition of the academic writing methods of the past from the viewpoint of which was emphasized. Third, we focused on the method of writing for children and beginners that can be confirmed in large numbers from the mid-term onwards, and clarified the learning method newly proposed in that period.

研究分野：中国書学・中国書法史

キーワード：指南書 初学者 書論 模書 臨書 九宮法 結構法 年代別

1. 研究開始当初の背景

一般に書に関する言説を「書論」と呼ぶが、絵画史における「画論」と同様、書道史における「書論」も、伝統を踏まえながら発展してきた。本研究の研究代表者は、博士論文の執筆を通じて、中国清代に書法教育に関する文献が、それ以前に比して爆発的に増加したこと、また関連する未刊行の書論が多数、存在することを痛感し、下記の問題を意識するようになった。

関連して、清代の書法教育に関しては、科挙と翰閣体、現在の学校につながる「書院」における教育という観点から、大衆的向けの書法教育という側面は明らかになりつつあるが、個々の書論、書家を起点とした個別の書法教育という一面は、ほぼ閑却視されてきた。唯一、劉恒「清代的書法教育和城外影響」(『中国書法史・清代卷』江蘇省教育出版社、1999)が書法教育に関する個々の書論を取り上げて、その特徴に言及しているが、紙幅の都合もあってか、個別の事象についての言及に終始している恨みがある。また近年、下記のように中国各時代の書法教育に焦点をあてた論考も発表されている。

・向彬『中国古代書法教育研究』(中国社会科学出版社、2009)

・楊加深『北宋書法教育研究』(中華書局、2017)

・王新宇「元代書法教育研究」(『書法研究』総第118輯、上海書画出版社、2004)

上掲のように中国古代から元代までの書法教育については、その実態が明らかになりつつあるが、上記研究も科挙と翰閣体、あるいは宮廷書法の伝授といった側面、もしくは学校や宮廷という、いわば公的機関における書法教育が主題となっており、師弟、及び書家を基点として具体的にどのような書法指南が行われていたのかという点については、ほぼ言及されていない。これについては、当該期にその様相がうかがえる資料がほぼ存在しないという資料上の制約が多分に寄与していると考えられる。これに対し、清代では膨大な書論が著されたことにより、書論のなかでも書法指南や筆法の伝授に関する言及も増え、それを主題とするものも出てくる。また、当該期特有の、師弟間での書法伝授の問答を記録したもの(包世臣『安吳論書』)も一部、見られるようになるが、こうした点に着目した研究はほぼ見られない。また唐・宋以来の「永字八法」を駆使した用筆法や元人が発明したとされる「九宮法」をはじめとする結構法など、従前の書法教育で使用されていた手法が清代にどのように受容されたのか、という点に言及する研究も少しは見られるが、そもそも明代ではなく、なぜ清代に前代の手法が取り入れられるようになったのかという点についても明らかになっておらず、この点を明らかにしたいと考えたことが、本研究の直接的な契機である。

2. 研究の目的

従来、書法教育に関する書論については、その存在が画一的な書法、つまり通俗的な書法の産出にも繋がるため、研究者はこれらの使用を敬遠してきた恨みがある。一部、用筆法については、著名な書家の作品論を補うため、補助的に取り上げられることもあったが、特定の書家を基準としているため、極めて限定的であった感が拭えない。したがって、清代に著された膨大な書論は、具体的な書法教育の実態がうかがえる記述が散見されるにも関わらず、ほぼ閑却視されてきた、いわば未開拓の研究分野であるといえる。

本研究は、上述の問題に答えるべく、中国清代の書論を網羅的に用い、一定の視点を定め、そこから関連する言説を抽出し、具体的に書家や師弟を中心に、いかなる書法指南が行われていたのか、個々の事象をとりあげることで、清代における書法教育の実態解明を主要な目的とする。また関連して、未刊行の書論の発掘も副次的な目的とする。

具体的には、先行研究が指摘する執筆法や結構法などの視点を基点としつつ、当該期特有の書法教示の方法の発見に努める。更にこれら指南書や書法教示の書論が、なぜ直前の明代ではなく、それ以前の手法をとったのかという淵源の問題、ひいては、こうした書法教育に関する書論が隆盛した要因や時代背景についての解明も視野にいれたい。本研究は、上記検討により、新たな書論研究の可能性を目指すものであり、中華民国期、ひいては現代書法教育史への補完を目指すものである。

また先述したように、清代の書論には、依然として未刊行の稿本の書論が多数、存在する。例えば『中国書画全書』(上海書画出版社、1992)に収録される、王澐『翰墨指南』(上海図書館蔵)については、実見調査の結果、巻末に筆順を示す「作字先後法」が附されていることを、かつて発見した。これは、筆順という活字では表せない要素を具えていることが、収録されなかった要因であろうと推察される。また近年、刊行された『明清書論集』(上海辞書出版社、2011)も未刊行の稿本の書論を数編、収録しており、本研究でもこうした流れを引き継ぐべく、中国各地の図書館の調査を通して、未刊行書論の発掘に努めたい。

3. 研究の方法

本研究は、個々の書論から個別の事象を取り上げるという「ミクロ」的な視点から清代における書法教育の実相解明を目的とするが、研究期間内で清代の全ての書論を分析することは、困難を極めると予想される。そのため、以下の対象、及び観点に絞って、重点的に分析を進めた。

(1) 対象とする資料

主要かつ広範な書論を収録する『中国書画全書』(上海書画出版社、1992)や『明清書論集』(上海辞書出版社、2011)などを中心に、遺漏は他書で補い、下記、視点に関する言説を網羅的に収集した。

(2) 考察の視点

当初は、文字の点画の組み立て方、形の取り方などの「結構法」、筆の使い方や筆の運び方などの「用筆法」、筆を持つ位置や持ち方などの「執筆法」の三点を考察の主要な視点と考えていたが、特に「用筆法」に関する言説が無数に存在することから、計画を下記のように変更して考察を進めた。

結構法のうち、特に一格を九つに分割する「九宮法」の清代独自の展開、及びその時代背景に着目した。元人が発明したとされる「九宮法」は、明代に下火となったが、それが清代になるとまた再興し、多くの書人によって提唱されることに鑑み、往時の新たな展開やその時代背景について迫った。

「敷き写し」とほぼ同意義の語である「模書」に関する言説が多数確認できることから、「模書」と「臨書」の捉え方、またその関連性を主要な視点とし、先学が指摘する、清代の学書における「位置」よりも「筆意」を重視していたとする説の是非も視野にいれながら、検討を進めた。

清代中頃から童子や初学者に対する書法指南の言説が多くみられるようになることを踏まえ、それらの特徴や展開を考究した。

4. 研究成果

上記の視点から考察を進めた結果、下記の成果が得られた。

第一に、一格を九つに分割する「九宮法」の検討については、包世臣による一字を対象とする「小九宮」と、縦三字、横三字の合計九字を対象とする「大九宮」説、蔣驥による更に細分化させた「三十六格法」や、紙面全体に九宮法を応用すべきとする説など、清代において「九宮法」が広く普及し、そして再展開していく様が確認できた。こうした章法に主眼を置き、より広い空間を意識した提言がなされた要因として、清代における書作品の巨大化が大きく寄与しているであろうことも指摘した。「九宮法」が発明されたとされる元代が横巻を主流としているのに対し、清代では条幅作品が多く揮毫されるようになった。この作品形式の変化が、既存の学習法の「九宮法」を更に発展させたといえる。

第二の「模書」と「臨書」の関係、学書における「筆意」の重視という問題については、多くの言説を大局的な視点から見渡すと、先学が指摘する、学書における「位置」よりも「筆意」の重視という風潮は、清代前期において確かに色濃く見られたが、それ以降、徐々に下火となっていったことが明らかになった。同時に、清代前期には混用していた「模書」と「臨書」を、中期以降、明確に区別する言及が増加していき、そしてそれらの順序にまで言及する説も多数、確認することができた。如上の点を踏まえると、清末にむけて、初学者向けの指南書が増加するにつれ、初学者が結体や位置を優先して学ばべきという気風が徐々に拡大していったことが要因であろうと考えられ、この風潮は上述の九宮法を推奨する気運の拡大とも合致することを指摘した。

また清代における模書説の新たな展開として、包世臣が唱えた、「模書」したものの上に紙を敷き、そのうえで「臨書」を推奨する、「模書」と「臨書」を組み合わせた新たな学習法の提言も確認することができた。上掲の九宮法とともに、包世臣が既存の学習法を改良し、新規学習法を提示していたことは非常に着目される。包世臣といえば、『芸舟双楫』などに見られる「気満」や「逆入平出」などが着目されるが、こうした新規学習法についても今後、検討していきたい。

第三に、童子や初学者向け書法指南については、清代中期以降の特筆すべき点として、年代別学習法や学書段階による用具用材の選択の推奨、集中的、あるいは継続的な多字数の習書の推奨などがあげられる。具体的には、初歩的段階における硬い毛筆の推奨、あるいは童子を年齢別に細分化し、各年代に分けた学習法の提示、また学書対象によって文字の大きさを変えるべきとするなど、学習者に対して、非常に細やかかつ具体的な指示が行われていたことを確認することができた。また、言説に個体差はあるものの、一か月間に三、四日は集中して習書すべきとする説や、半年から一年間は一日に300字から500字を継続して習書すべきとする説など、集中的な多字数の習書がある程度、推奨されていたことも明らかになった。同時に趙孟頫らの学書例をあげる言説も見られたことから、この点については、乾隆帝の趙孟頫信仰が大衆によって実践されたであろう可能性も指摘した。

以上の研究成果は、中国清代に新たに提唱された学書方法や学書の順序、年代別学習法など、往時の書法教育の一側面を明らかにしたのみならず、現代の書法教育と通じる学習法が既に清代に提言されていたことを明らかにした点にも意義が見いだせる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清代の書論にみられる、童子や初学者向け書法指南について
3. 学会等名 書論書道史研究会第31回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清代の書論における模書の展開
3. 学会等名 書論書道史研究会第26回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清代における九宮法の展開
3. 学会等名 書論書道史研究会第20回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石飛博光ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 160
3. 書名 書道	

〔産業財産権〕

〔その他〕

石井雙石 篆刻の巨匠
<https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/1223905100/topg/souseki.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------